

贈与と購入 二(千字)

物を手に入れる方法には、もらうことと、買うことがある。もらうことを「贈与」、買うことを「購入」という。どちらも物が自分のところに来る点では同じだ。

贈与は、お返しのできないものを受け取ることだ。親が赤ちゃんのころから世話をしてくれたことは、お金ではらい返せない。困ったときにかけてもらった言葉も、同じ値打ちのものを返すことはできない。贈与は、「自分は返せないものを受け取っている」と気づくところから始まる。次に、贈与では、受け取ったあとに関係が残る。返しきれないものを受け取ったという思いが残るので、相手のことを忘れず、いつか別の形で何かをしたいという気持ちが続く。親に世話をしてもらった人が、大人になつてから親を気づかうのは、その関係が残っているからである。身近な例は、プレゼントと親の世話だ。プレゼントは、物だけでなく、それを選んでくれた時間と気持ちごと受け取る。親の世話は、子どものころは当たり前を受け取っていて、大きくなつてから「あれは返せないものだった」と気づく。

たとえば、誕生日に友だちから手作りのしおりをもらったとする。物は紙一枚だが、どの色にするか考え、名前を書いてくれた時間と気持ちごと受け取っている。その時間と気持ちには値段がつけられないので、同じしおりを返しても返したことはない。もらった子は、友だちの誕生日が近づくと、何かをしたいという気持ちになる。

購入の場合は、お金と物を交換することだ。店で百円をはらつてパンを受け取れば、貸し借りは残らない。はらった金額と受け取った物の値打ちがつり合っていて、そこでやりとりは終わる。関係はどうか。購入では、お金をはらった時点で、売る人と買う人の関係は終わる。店員の名前を知らなくても買えるし、買ったあとに店へ何かをする義務もない。だから、知らない人どうしてもやりとりができる。身近な例は、店での買い物だ。文房具屋でしおりを買えば、気に入ったものを選ぶのは自分で、店はお金を受け取るだけである。

文房具屋の店先で、友だちがくれたのと同じしおりが百円で売られているのを見つけたとする。百円をはらえば、同じしおりが手に入る。しかし、店員が自分のために色を選んでくれたわけではなく、店を出たあとに店員のことを思い出すこともない。物は同じでも、受け取っているものがちがうのである。

関係が残るか残らないかというちがいは、返せないものを受け取ったか、返せるものを受け取ったか、というところから来ている。

贈与と購入 二（千字） 課題

課題一

この文章を二百十字以内で要約しよう。

[illegible]

課題二 比べている観点を三つ書こう。

①

②

③

贈与と購入 三（千字・硬い語彙）

物入手する方法には、贈られることと、購入することがある。贈られることを「贈与」、購入することを「購入」と呼ぶ。いずれも物が自己のもとに到来する点では同一である。

贈与とは、返礼の不可能なものを受けることである。親が乳児のころから世話をしてくれたことは、貨幣によって返済できない。困難な際にかけてもらった言葉も、同等の価値のものを返すことはできない。贈与は、「自己は返済不可能なものを受けている」と気づく地点から始まる。さらに、贈与においては、受け取った後も関係が持続する。返済しきれないものを受け取ったという意識が残るため、相手を忘れず、いつか別の形で何かをしたいという思いが継続する。親に世話をしてもらった者が、成人してから親を気遣うのは、その関係が持続しているからである。身近な事例は、贈り物と親の世話である。贈り物は、物だけでなく、それを選んでくれた時間と心情ごと受け取る。親の世話は、幼少期には当然のものとして受け取っており、成長してから「あれは返済不可能なものであった」と気づく。

誕生日に、友人から手作りのしおりを贈られたとする。物は紙一枚であるが、どの色にするかを考え、名前を記してくれた時間と心情ごと受け取っている。その時間と心情には価格を付けられないため、同一のしおりを返しても返済したことにはならない。贈られた子どもは、友人の誕生日が近くと、何かをしたいという思いを抱く。

購入になると、事情が異なる。購入とは、貨幣と物を交換することである。店で百円を支払ってパンを受け取れば、貸し借りは残らない。支払った金額と受け取った物の価値が均衡しており、そこでやりとりは終了する。購入においては、貨幣を支払った時点で、売り手と買い手の関係は終了する。店員の名前を知らずとも購入できるし、購入後に店へ何かをする義務もない。ゆえに、見知らぬ者どうしてもやりとりが成立する。身近な事例は、店での買い物である。文房具店でしおりを購入すれば、気に入ったものを選択するのは自己であり、店は代金を受領するのみである。

たとえば、文房具店で、友人が贈ってくれたのと同じのしおりが百円で販売されているのを発見したとする。百円を支払えば、同一のしおりが入手できる。しかし、店員が自己のために色を選んでくれたわけではなく、店を出た後に店員のことを想起することもない。物は同一でも、受け取っているものが異なり、残る関係も異なるのである。

